

ク 史跡・塚・石仏とその由来

土屋における遺跡をはじめ、古墳・塚・石仏・史跡等はざっと70を数えます。

平成2年9月に市教育委員会で作成した資料によると、市全域で299ヶ所の遺跡があり、土屋では全体の1割弱の24ヶ所が指定されています。

また、旭南部・土沢地区の石仏群はおよそ400もあり、そのうち土屋には全体の四割強の180余りとなっています。道祖神24(40%)、馬頭観音21(50%)、石祠13(54%)が特に目立ちます。

いかにこの地域が古く、また我々の先輩諸氏が大切にされてこられたかが伝わってきます。

ここでは、土屋における遺跡・史跡等をたずね、これらの由来を紹介します。

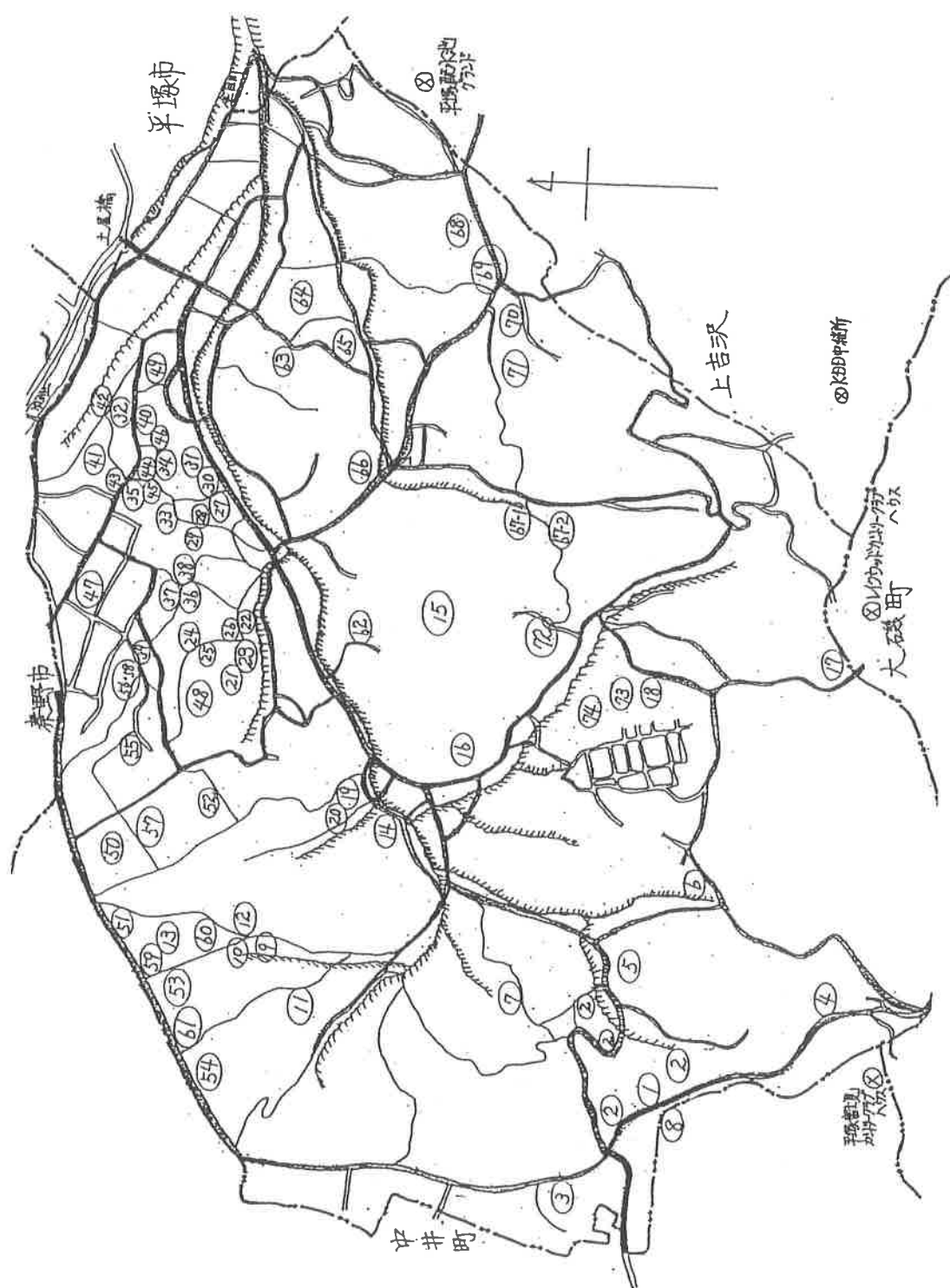
(注) 遺跡：過去の人類がのこした痕跡のうち、土地に固定していて位置を動かすことができないもの。貝塚・住居跡・古墳など。

史跡：史蹟ともいい、歴史上、重要な事件や各種の施設の跡。

・ I - 1	七国峠の供養松	上惣領(矢沢)	[4917番地付近]
・ I - 2	上惣領の百番観音と石仏群	上惣領(矢沢)	[4901番地付近とその周辺]
・ I - 3	上惣領の富士塚	上惣領(矢沢)	[4944番地付近]
・ I - 4	長兵衛茶屋跡〔旧4859番地の先〕	上惣領(矢沢)	[新4784番地付近]
・ I - 5	田沢氏の墓	上惣領(矢沢)	[4679番地]
・ I - 6	尼ヶ滝	上惣領(矢沢)	[3806番地付近]
・ I - 7	愛宕下古墳	上惣領(矢沢)	[字愛宕下一帯]
・ I - 8	六ツ塚(むつつか)〔含中井町〕	上惣領(矢沢)	[4897番地付近]
・ I - 9	駒ヶ滝とホテルの里	惣領分上谷	[4122番地付近]
・ I - 10	駒ヶ滝古墳	惣領分上谷	[字駒ヶ滝一帯]
・ I - 11	上谷横穴	惣領分上谷	[字広町一帯]
・ I - 12	大庭景親臣下の供養碑	惣領分上谷	[4124番地付近]
・ I - 13	十三塚	遠藤原・惣領分上谷	[4124番地付近]
・ I - 14	窪田氏の墓	惣領分八反田脇	[3167番地]
・ I - 15	堀切遺跡	惣領分八反田脇	[字堀切一帯]
・ I - 16	惣領分の浅間さま登山碑	惣領分八坂下	[3100番地付近]
・ I - 17	杜鵑山宝篋印塔	惣領分琵琶	[2645番地付近]
・ I - 18	琵琶の地藏尊	惣領分琵琶	[3332番地付近]
・ I - 19	十二社地藏尊	上庶子分	[799番地付近]
・ I - 20	十二社横穴	上庶子分	[字十二社一帯]
・ I - 21	源水横穴古墳群	中庶子分	[943番地付近]
・ I - 22	源水の水神さま	中庶子分	[1053番地付近]
・ I - 23	亜炭層	中庶子分	[字源水・八面一帯]
・ I - 24	浅間神社石碑	中庶子分	[1058番地付近]
・ I - 25	寺窪古墳	中庶子分	[字寺窪北側一帯]
・ I - 26	寺窪B横穴群	中庶子分	[字寺窪南側一帯]
・ I - 27	土屋城跡(土屋の館)	下庶子分	[1166番地付近]
・ I - 28	土屋氏一族の墓	下庶子分	[1166番地付近]
・ I - 29	牢屋敷跡	下庶子分	[1153番地付近]
・ I - 30	子育て地藏(門前地藏)	下庶子分	[1181番地付近]

・I-31	大庭遺跡	下 庶 子 分	[字大庭一帯]
・I-32	根岸古墳	下 庶 子 分	[字根岸一帯]
・I-33	のろし台跡	小 熊	[土屋の館北側の台地]
・I-34	物見の松	小 熊	[大乘院と鉄砲馬場の間]
・I-35	土屋竪穴式複郭古墳	小 熊	[245番地付近]
・I-36	牢屋跡	小 熊	[1076番地付近]
・I-37	水呑地蔵	小 熊	[1159番地付近]
・I-38	処刑場跡	小 熊	[1158番地付近]
・I-39	さらし首場跡	小 熊	[458番地付近]
・I-40	浅間大社と「国威発揚」の碑	小 熊	[184番地付近]
・I-41	小熊の腰郭(曲輪)と古井戸跡	小 熊	[215番地付近]
・I-42	練り田・練り畑(ねりだ・ねりばたけ)	小 熊	[92・74番地付近]
・I-43	六体地蔵と供養塔	小 熊	[225番地付近]
・I-44	日牌堂と鍾楼	小 熊	[208番地付近]
・I-45	小熊A遺跡	小 熊	[大乘院付近一帯]
・I-46	小熊B遺跡	小 熊	[大乘院東側付近一帯]
・I-47	小熊原遺跡	小 熊	[字小熊原一帯]
・I-48	長坂遺跡	小 熊	[字ミズ一帯]
・I-49	ヨウジ遺跡	小 熊	[字ヨウジ一帯]
・I-50	遠藤原の大山灯籠	遠 藤 原	[531番地付近]
・I-51	遠藤原の地蔵座像	遠 藤 原	[612番地付近]
・I-52	比丘尼塚	遠 藤 原	[866番地付近]
・I-53	五十塚	遠 藤 原	[字遠原一帯]
・I-54	六十塚	遠 藤 原	[字遠原一帯]
・I-55	三之塚(三王塚)	遠 藤 原	[419・513番地付近]
・I-56	遠藤原A古墳	遠 藤 原	[字東遠藤原一帯]
・I-57	遠藤原A遺跡	遠 藤 原	[字遠藤原東側一帯]
・I-58	遠藤原B古墳	遠 藤 原	[字長坂一帯]
・I-59	遠藤原B遺跡	遠 藤 原	[字遠藤原西側一帯]
・I-60	遠原古墳	遠 藤 原	[字遠原一帯]
・I-61	遠原遺跡	遠 藤 原	[字遠原一帯]
・I-62	土屋窪地下式坑	寺 分 中	[1777番地付近]
・I-63	富士講石祠	寺 分 中	[1992番地付近]
・I-64	打越遺跡	寺 分 中	[字打越一帯]
・I-65	梨子木窪遺跡	寺 分 中	[字梨子木窪一帯]
・I-66	妙圓寺の石仏	早 田	[1949番地付近]
・I-67	早田の石仏ーその1ー	早 田	[2324番地付近]
・I-67	早田の石仏ーその2ー	早 田	[2405番地付近]
・I-68	忠魂碑	人 増	[2136番地付近]
・I-69	人増の館跡	人 増	[2188番地付近]
・I-70	人増の石仏群	人 増	[2492ー1番地]
・I-71	人増の大塚と三つの塚	人 増	[字水上ケ]
・I-72	琵琶のオシャモツアンと石碑	惣 領 分 琵琶	[2843・2847番地付近]
・I-73	琵琶の供養塚	惣 領 分 琵琶	[2818番地付近]
・I-74	琵琶の馬頭観音	惣 領 分 琵琶	[2821番地付近]
・I-75	人増の石仏	人 増	[字下水上ケ]

I : 史跡・塚・石仏



[由 来]

・七国峠の供養松 [I- 1] 上惣領(矢沢)

七国峠は湘南平よりやや高い峠です。近年までこの「供養松」という巨木がありましたが、枯れてしまい今はありません。伝説によると、この松は、治承4年(1180)8月、頼朝が挙兵したとき、宗遠は一族を率いて参戦しました。この時石橋山の合戦で実子の弥次郎忠光を失いました。のちに、戦死したわが子と従僕たちのために箱根・伊豆が一望できるこの峠に、供養の松を老いの手で植えたといわれています。また、この松は、遠く大山からもよく見えたといわれています。

供養松のあった場所は、七国峠バス停留所からゴルフ場へ向かって左側で、上屋の石黒勝氏宅へ通ずるみちの手前でした。そばには神奈川県企業庁水道局の「上惣領高区配水池」があります。

・上惣領の百番観音と石仏群 [I- 2] 上惣領(矢沢)

矢沢には、自然石に「百番観音」と彫った石仏〔享和元年(1801)〕が、文化8年(1811)の巡拝塔(奉禮觀世音菩薩)とともに祀られています。ここには、底抜け柄杓を供えて、安産を祈願します。「百番観音」とは、観音霊場巡りとして、西国三十三か所・坂東三十三か所・秩父三十四か所の霊場を巡り、全部で100か所の霊場を巡ったことになり、そこで「百番供養塔」として、この石仏「百番観音」を祀ったと思われます。なお、巡礼は、インドから中国を経て、我が国に伝わった風習で、世界各地の宗教に共通しますが、聖地・霊場を巡拝することで、功德を受け冥福を得るという信仰に基づくといわれています。そして、巡拝成就記念に石塔が立てられました。その多くが、観音霊場巡りと四国八十八か所霊場巡りです。

矢沢には、このように数々の石仏・供養塔などが、図のようなところに祀ってあります。その石仏・供養塔等はつぎのようになっています。

中川* 「牛頭觀世音 昭和五十四年十一月吉日 石黒邦義」 栗田氏宅付近
「月山湯殿山百番供養 文化五戊辰年四月八日 石黒平兵衛 石黒宗造氏宅付近

* 四万八千日地藏講と刻まれたものが、次のように祀られています。石黒太一郎氏宅付近

「馬頭觀世音 明治六年酉正月」・彫像觀音様碑「安永五年 八沢村石黒長兵衛」

「馬頭觀世音 明治二十年四月」・「馬頭觀世音 明治四十四年十二月」一計4基
上屋* 天宗院の裏手の道を、県道から南へ入って行くと、浅間坂があります。その坂の左手に3基、石黒勝氏宅を過ぎて、やはり左手に1基、つぎのように祀られています。

「百番供養 享和元辛酉年二月吉日 石黒長兵衛」

彫像觀音様碑「奉禮觀世音菩薩 文化八年辛未二月吉日」

「馬頭觀世音 明治二年正月二十八日」○紋左衛門」----- 計3基

「馬頭觀世音 文化十三丙子歳十月吉日 石井幸右衛門」----- 計1基

下屋* 天宗院の寺域には、つぎのように祀られています。

「庚申供養塔 元禄十一戊寅天六月」(台座の正面と左右に申の彫像があります)

「百番觀世音供養塔 文化十四年丑十一月吉日」

六地藏「奉造立六道地藏道 十方恒沙佛六道證知我 今乘二尊教廣開淨土門」

〔施主 天宗院檀徒会 昭和六十年五月吉日 石庄小沢庄造施工人 維持〕

「慈母觀世音 平成三年三月吉日 秋山政春氏建立」

この慈母觀世音像の台座側面には、「ひそかな善意 明るい社会 感謝しあって
すなおに生きる」という、建立者の意が刻まれています。

半鐘（銅製）「元禄十三年庚辰一月吉日 當山三世堅者眞有法印

相州大住郡土屋村八澤山天宗院

十方三世一切諸佛—————」と刻まれています。

（注）半鐘：小形の釣鐘で、寺院または陣中火災の合図に打ち鳴らすのに用いた
が、今は使用されなくなりました。

中入＊馬頭觀世音 明治十四年 大野」 大野ヤス氏宅付近

・上惣領の富士塚 [I-3] 上惣領（矢沢）

矢沢には、富士講があり、月1回ずつヤドに集まり、年一回だけ、浅間神社の石祠
（富士塚）に参拝したといわれています。この浅間神社の石祠は、七国峠から遠藤原
へ行く途中（4944番地付近）の左手の小高いこんもりとした雑木林の中にありま
す。富士山を背にして東向きに立てられた、非常にめずらしい、土屋でもなかなか発
見できない手のこった形をした屋根の石祠で、屋根には「東」と刻まれています。石
祠の右側には、「土屋八沢村」と刻まれています。ほかの文字は風化して 判読で
きません。また、そばにはかなり太い榊（さかき）が植えられており、歴史の古さが
分かります。秋山政春氏が管理しています。

・長兵衛茶屋跡 [I-4] 上惣領（矢沢）

上惣領（矢沢）に七国峠があります。西は上郡中井町、南は二宮町の方に接してい
る分岐点です。土地の人はここを「高見台」（たかんど）と呼んでいます。むかし土
屋三郎はここに物見を置き、領内の守りにあたったといわれています。変わったこと
があれば、ここで「のろし」を焚いて一族に知らせるようにしていたと思われます。
中井の方は中村氏の所領であり、二宮の方は二宮四郎の所領で、共に土屋氏の一族
で、ここでのろしをあげると各氏に連絡できたものと思われます。ここに長兵衛茶屋
の跡があります。この茶屋は大磯の六所神社の国府祭（こうのまち）や吾妻神社、川
勾神社等の祭典のときは、とくに賑ったといわれています。

この場所は、平塚カントリークラブの砂置場（4859番地）の急な坂道を、中井
町の方へ向かって上がっていくと、標高180mくらいのところに着きます。

そのところが「たかんど」と呼ばれる、高見台で昔は長兵衛茶屋がありました。こ
こには、大きな2本の松が植えてありましたが、現在は枯れてありません。

現在は広いゴルフ場が出来ていて、ゴルフ場へ通ずる道路の左手（4784番地）
に新しく、長兵衛茶屋として設けました。そこから見渡す展望は、誠に見応えがあ
り、土屋が一望できます。

また、明治17年（1884）5月におきた卯三郎事件（宮代屋事件）の8人の加
害者がここで謀議をこらしたといわれています。

なお、この地は遠藤原と同じく、「平塚市の百景」のひとつに指定されています。

- ・田沢氏の墓 [I- 5] 上惣領 (矢沢)
天宗院は草創のころは「弥陀薬師堂」と呼ばれ「落ち武者寺」であったと伝えられています。この寺の開基は地頭田沢久左衛門で1654年5月27日に没しています。法名、天宗院殿心誓了清安徹大居士で、墓域には2代久左衛門、3代久助および初代奥方の墓石があります。

- ・尼ヶ滝 [I- 6] 上惣領 (矢沢)
七国峠へ行く県道の、矢沢からゴルフ場へ分かれる道を約300mほど進んだ左側の水田の奥を流れる川に、この、「尼ヶ滝」があります。滝の高さは、約10mを2段に落ち、滝壺も二重になっています。上段の滝は8m、下段は2m、下の滝壺は直径9m・深さ1.5m、上の滝壺は近寄れず計測できません。下流には「尼ヶ淵」があります。

- ・愛宕下古墳 [I- 7] 上惣領 (矢沢)
平塚市教育委員会文化財保護担当が、平成2年に作成した埋蔵文化財一覧による。

- ・六ツ塚 (むつつか) [I- 8] 上惣領 (矢沢)
七国峠バス停から、ゴルフ場へ通ずる道路を500m程進んだ4897番地付近に、「六ツ塚」があったとされる場所があります。

その名のとおり、むかしこの地に「六つの塚」があったことから、「六ツ塚」と名付けられました。それが誰の塚かは、定かではありません。

土地の人の話では、50年くらい前に、直径6尺(180cm)・高さ3尺(90cm)くらいの石が、一つだけそこにあり、試しにその石の下を掘ってみましたが、何も出てこなかったということです。また、昭和11年(1936)ころ、道を挟んで斜め向かい側に、大きなどんぐりの木の根っこがあり、もう一つの塚の「ふんばり」の跡が感じられたということです。

戦後、畑として利用され、現在はその「六ツ塚」の形跡はありません。今は地名として「六ツ塚」が残るのみです。

余談ですが、そのむかし「六ツ塚」の地は、矢沢山の高台の原っぱで、各家々で大凧(糸を大ざるで手繰るほど大きな凧)揚げを、競って楽しんだということです。大空に大凧が舞う姿は、当時でも圧巻だったに違いありません。

- ・駒ヶ滝とホタルの里 [I- 9] 惣領分上谷 (4086番地付近)
土屋の西部字駒ヶ滝の標高80mに位置し、南東を向き、幅はおよそ30cm、高さはおよそ9mの滝です。滝の周辺は、丘陵の奥まった雑木林となって、紅葉時期には一段と映えて見えます。地元の人々は、この滝を通称「お滝さん」といいます(図中A)。

滝の左側の中腹には、岩盤を切り開いて、「石碑」3基・「竜の石像」1基〔弘化4年（1847）10月〕の清龍観世音が祀られています。また、周囲には杉の大木（周囲2.5m）が3本あります。

往昔より熊野神社の祭典に、神馬を清めたので名付けたともいわれています。また、以前は飛沫を上げる滝壺で水籠もり（みずごもり）の修行があったともいわれています。

「お滝さん」は、拝見する場所によって、ずいぶんその趣も違います。向かって右側の中段に上がると、周囲とよく調和して落ちついて拝見できます。

駒ヶ滝の源を探るため、滝の最上段に登ってみると、図のように二手に分かれ、左へ延びる水筋は細く、その先でまた二手に分かれており、特にその右へ延びた先には、標高110mの位置に、「お滝さん」のほぼ真北に「お滝さん」と同様な、落差約9m強の立派な「滝」があります（図中B）。普段は、その水量はあまり見られず、少々の水量が見られる程度ですが、雨天の続いたときは、「滝」として見るができます。

土屋の「駒ヶ滝」は、平塚市内で「唯一の本格的な滝」ですので、市民が気軽に見学できるように、自然環境と調和させて整備・保存をしていただきたいもののひとつです。

〔調査 平成9年（1997）7月12日 雨〕

また、ここ「駒ヶ滝」の他に、字清見原の竹林内には、大小4つの滝があります。まさに土屋の秘境といってもよいこの地域に、このような数多い滝が存在することを、地元の人でも知っている人は少ないと思います。（図中C～F）

（注）滝：川床（かわどこ）の一部が垂直になって、流れが川床を離れて落ちる場合をいう。なお、川床を離れることなく、音を立てて流れる急流を早瀬（はやせ）という。

〔ホタルの里〕―――字駒ヶ滝から南へ字愛宕裏にかけて

土屋の環境は、近年著しい変化があります。その昔から土屋の里は、豊かな丘陵地として雑木林で形成される里山があり、それらが谷戸（やと）・谷戸田（やとだ）をつくり、そこから発生する「きれいな水」は、それらを集めて「小川」となって「座禅川」「三笠川」として、私たちの生活を支えてきました。

そのような良い環境の中で、カブトムシ・クワガタ・セミ・野ウサギ・ヘビ・オオヒキガエル・キジ・コジュケイ・ヤマドリ・メジロ・ウグイス・シジュウカラ・ホオジロ・カワラヒワ・アオジ・カワセミ・コゲラ・ヒバリ・トンボ・チョウ・オタマジャクシ・メダカ・カメ・ウナギ・フナ・ハヤ・アメンボ・ゲンゴロウ・タニシ・ホタルなど、たくさんの生物が生息していました。

また、平成5年（1993）ころには、この「愛宕裏」付近の杉林に「オオタカ」が営巣して、子育てをしていました。

最近では、雑木林への管理〔下草刈り（毎年）・薪山（約10年に一度雑木を切って薪やしいたけの原木にする）〕がされず、また田んぼ（特に、谷戸田の奥まった田）の耕作が次第にされなくなってきています。それに加えて農薬の大幅な使用もあり、里山や水辺に暮らす「いきものたち」も、次第にその姿を消そうとしています。

そのひとつに「ホタル」があります。昭和50年（1975）ころまで、土屋のどこでも見られましたが、最近では、一部の地域でしか見ることはできません。

駒ヶ滝から南へ約600m行ったところに、字愛宕裏があり、その周辺は里山から湧き出た「清水」と「谷戸田」や「水辺」が良く「調和」しており、「ホタル」の繁殖には最適な環境であり、貴重な昆虫として生息しています。このような自然環境は未永く守られ、人と動植物とが共生できるようにしていくことは、大切なことだと思います。

（注）丘陵地：なだらかな低い山地をいい、標高80～120m位の小山が連続性を持っているところで、土屋は大磯丘陵に属しています。

里 山：丘陵地にある小山で、人家の周辺で農林業によって形成された雑木林・田畑・竹林などが組み合わさり、人と長い間共存してきた自然環境を、「さとやま」と呼んでいます。この里山は、様々ないのちを育んできました。

谷 戸：里山と里山とに挟まれた谷間をいいます。生物たちの繁殖にはなくてはならない絶好の場所で、私たちの生活にも非常に大切なところです。ここから、「清水」が湧きだして生物の絶対条件をつくり出します。

谷戸田：里山から湧き出した清水を利用して、私たちは田んぼを耕作します。土屋には、谷戸が数多く（昔の人の言い伝えでは、99ヶ所あるそうです）あり、土屋の水田耕作面積の相当数を占めていました。

駒ヶ滝石像

記念五十周年 神通方總 齋原覚道

刈 清 瀧 不 動 尊

昭和三十六年十二月吉日 前建名者 伊原之覚助道

明治四十三年十一月

大 社 藤原伊之助 神

大正十一年

不 動 尊

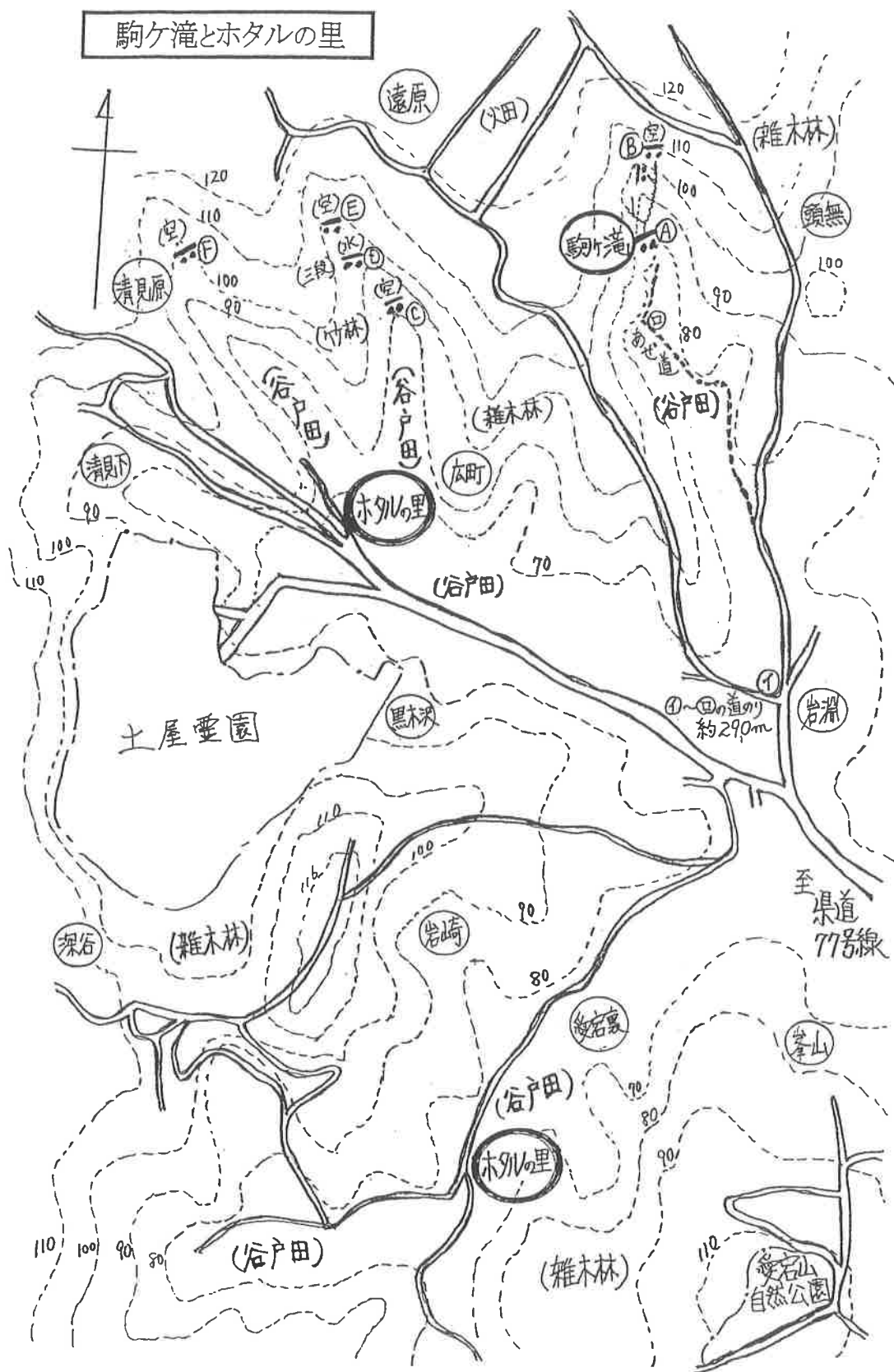
十一月十七日

弘化四年丁未 (1847)



十月吉日

駒ヶ滝とホテルの里



- ・駒ヶ滝古墳 [I-10] 惣領分上谷
 平塚市教育委員会文化財保護担当が、平成2年に作成した埋蔵文化財一覧による。
- ・上谷横穴 [I-11] 惣領分上谷
 平塚市教育委員会文化財保護担当が、平成2年に作成した埋蔵文化財一覧による。
- ・大庭景親臣下の供養碑 [I-12] 惣領分上谷
 字駒ヶ滝から字遠原にかけて、遺跡や古墳が多数ありました。後述の十三塚もそのひとつですが、この供養碑は、駒ヶ滝の落ちる水の音を聞きながら、赤坂を遠藤原へと登っていく坂の途中（4124番地付近）右手に塚があります。
 供養碑には、「妙法大庭景親臣下戦死霊」と刻まれており、大正10年に惣領分の岩本和吉氏が、大庭景親臣下の戦死者の供養として祀られたものと思われます。
- ・十三塚 [I-13] 遠藤原・惣領分上谷
 前述のように、この地域は非常に多数の古墳・塚が発掘されました。
 これは、南北朝から戦国時代にかけてたくさんの戦（いくさ）が行われて、土屋地区を戦場とした時の、戦死者の墓と思われます。
 本来ならば、そのまま墓として残さなければならぬのですが、生活をするうえで畑として、開墾を余儀なくされたと思われます。したがって、他の地区と同じくその塚の姿はほとんど見られなくなりました。
- ・窪田氏の墓 [I-14] 惣領分八反田脇
 芳盛寺の墓域に、惣領分地頭窪田氏の墓が4基あります。東側に寛永10年（1633）この地に采地替えとなった旗本御金奉行窪田又六郎正次（法名大円道智）とその妻の墓2基と、それに続いて正次の養子又右衛門正俊（旗本大番組、法名心解徳翁）と妻女の墓が2基相添って建てられています。
 窪田氏は大住・洵綾両郡内に452石余を知行（ちぎょう）していました。
 （注）1石：10斗（俵2.5）・100升（180L）＊〔1升＝1.8L〕
- ・堀切遺跡 [I-15] 惣領分八反田脇
 平塚市教育委員会文化財保護担当が、平成2年に作成した埋蔵文化財一覧による。
- ・惣領分の浅間さま登山碑 [I-16] 惣領分八坂下
 八坂神社の社域（本殿向かって左側）に建っています。惣領分の富士講は盛んで、富士登山をする時は、カタヤマだけではいけないといって、帰ってきたら大山に登りました。また、富士山へ行くととき、帰って来たときには、必ず熊野神社へ参拝したといわれています。
- ・杜鵑山宝篋印塔 [I-17] 惣領分琵琶
 琵琶から大磯町黒岩へ抜ける起伏の多い坂道のあたりに杜鵑山があります。夏には「ほととぎす」が鳴きわたるので、この名があるといわれています。またこの小路は

土屋から大磯を経て鎌倉に行く道で「鎌倉みち」ともいわれています。

琵琶の集落からレイクウッドカントリークラブのクラブハウスへめがけて坂を登り切ると、ハウスの手前左手に一段と高い築山風の丘があります。そこに、宝篋印塔が立っています。

市内でも屈指のこの宝篋印塔は、高さがおおよそ3.5mもあり、正面に「宝篋塔」と刻まれています。裏面には、「土屋村惣領分上人塚建之 安永七戌戌十二月相州大住郡土屋村俗名吉川平左衛門 正重 當八十四歳也 為無縁法界」と刻まれています。また、この他に2基の供養塔も同時に祀られました。これは、琵琶の吉川氏の先祖が供養として祀ったものと思われます。

また、宝篋印塔の左側には、「寒梅や 春待つわれは しおれゆく」正重84才の作といわれています。

建暦3年(1213)5月、和田義盛から応援を依頼された土屋次郎義清は、義のために和田軍に投ずべきか、否か思い悩みましたが、遂に敢然として鎌倉に赴き、北条の軍に痛撃を加えて戦いました。しかし、武運つたなく、「流れ矢」に当たって戦死しました。

義清は、この鎌倉援護のとき、この杜鵑山(鎌倉みち)に出て、磯伝いに鎌倉へと馳せ参じたと思われます。このときの様子を詠んだ、

「行こか鎌倉、戻ろか土屋、思ひみだる杜鵑山 いまも血に鳴くほととぎす」という古謡が伝えられています。

一説によると、ここは土屋三郎宗遠の「鎧塚(よろいづか)」ともいわれています。

(注) 安永年間：1772～1780年の間をいう。

・琵琶の地蔵尊

[I-18]

惣領分琵琶

琵琶の集落から子ノ神神社の前を通り、レイクウッドカントリークラブのクラブハウスへめがけて坂を登る途中(3332番地付近)右手の高台に、五輪塔が6基並び、その奥の一角に地蔵さまが2体祀られています。向かって左側の地蔵は念仏講中の供養地蔵、右側の地蔵は座像で「南無三界六霊」と刻まれています。

なお、琵琶の集落から前述したコースに入って、15mほど行った子ノ神神社手前の右側に、文化3年(1806)の念仏講の供養碑が立っています。

・十二社地蔵尊

[I-19]

上庶子分

昔字十二社の権現さんには、12の神仏が安置されていましたが、時代の流れとともにその数が減り、現在は1体の仏像(左手に宝珠、右手に錫杖を持った地蔵菩薩座像)が残るのみとなりました。上庶子分と遠藤原でお守りをしていましたが、一時中庶子分の自治会館に保管安置され、再び字十二社の地に念仏堂を建てて安置されました。毎月23日には、念仏供養をしています。

なお、この地蔵尊は、小田原板橋の地蔵尊と同じ木で作られていると伝えられ、二つの地蔵尊は兄弟地蔵といわれています。

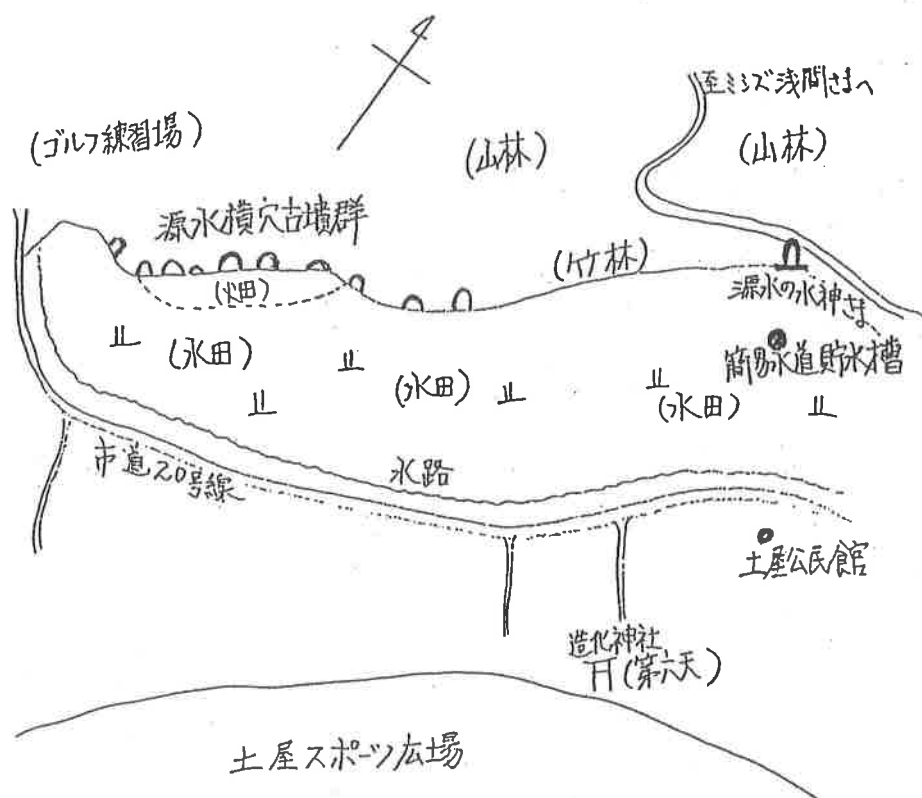
(参考) 十二社(じゅうにしゃ)：963年7月(一説には1370年)の制で、祈雨の神社ともいわれている。竜穴・火雷・火主・木嶋・乙訓・平岡・恩智・広田・生田・長田・坐摩・垂水をいう。

[広辞苑より]

- ・十二社横穴 [I-20] 上庶子分
平塚市教育委員会文化財保護担当が、平成2年に作成した埋蔵文化財一覧による。

- ・源水横穴古墳群 [I-21] 中庶子分
中庶子分字源水の谷戸の北側（土屋公民館の西側約200m）に東南に向かって大小14個ほどの横穴古墳群があります。この古墳群は穴の構造、大きさから推測してほぼ6～8世紀のころの豪族の墳墓と考えられます。穴の奥には遺体を安置した跡を残しているものが3個ほどあり、これらは入口に比べて内部の方が広がっています。昭和34～35年頃には人骨・土器等が発見されています。
平成9年（1997）末には、心ない無関心な人達により、無残にも埋め立てられ、その面影は無くなりました。誠に残念なことです。

字源水付近の図



- ・源水の水神さま [I-22] 中庶子分

字源水は、昔から良質の水が湧き出ているところで、水田耕作の用水として使用していました。昭和17～23年ころまで、戦争中の燃料不足を補うため亜炭の採掘がされ、その坑道に水が流れ出し、水田は早ばつ状態となりました。採掘が終わり、坑道の一部を埋め戻したら、その水が吹き出したので、中庶子分地区では、これを簡易水道として利用し、再び水田用水としても利用されるようになりました。

近年は、水質・水量ともに低下傾向にあり、上水道として利用はあまりされなくなっていますが、昭和25年（1950）9月に立てられた「水神」の石碑は、長年お世話になっている水源でもあり、感謝の意味でありがたく祀ってあります。

・亜炭層 [I-23] 中庶子分

中庶子分字源水の谷戸一帯とその周辺にあり、新第3世紀のころ、地上に生い茂っていた樹木が、地球の変動にともなって、地層に埋まり、炭化したものを、亜炭または樹炭といい、石炭と区別されます。

いわゆる関東ローム層の下層数メートルの所に、層を成して埋まっています。ここから出土する亜炭は、木目があって、板状に剥離します。この亜炭を採取して、詳細に調査をおこなったら、太古の植物の種類、状態などを、知ることができるでしょう。

源水の亜炭層は、昭和17年ころに採掘が始められ、昭和23年ころまで続けられましたが、その需要は次第になくなり採掘は終了し、坑道の入口を埋め戻されました。

また、土屋の地層には、軽石が多く堆積され、昭和30年代には現在の土屋小学校がある山等で、採掘されました。採掘された軽石は、軽量ブロックの材料として利用されました。

（注）軽石：火山から噴出した溶岩が急冷する際に、含有するガスが逸出して多孔質海綿状となった岩石で、質脆く小孔があり、水に浮きます。物をこすり磨くのに用いたりします。「うきいし」ともいいます。

・浅間神社石碑 [I-24] 中庶子分

字ミシズにあります。字寺窪の遠藤原へ通ずる急な坂（中庶子分の水神さまの裏手）を両側の雑木林を見ながら、およそ300mほど登ると、急に前が開け正面に富士山が見えます。その登り切った右手の、こんもりと盛り上がった台地に、庶子分の富士講で祀った石碑があります。その左手には、移動通信に利用する無線中継基地（日本移動通信（株）下大槻BS）のアンテナ塔が立っています。

石碑には、「御富士神 庶子分社中 明治十九年八月建之」と刻まれています。

・寺窪古墳 [I-25] 中庶子分

平塚市教育委員会文化財保護担当が、平成2年に作成した埋蔵文化財一覧による。

・寺窪B横穴群 [I-26] 中庶子分

平塚市教育委員会文化財保護担当が、平成2年に作成した埋蔵文化財一覧による。

・土屋城跡（土屋の館） [I-27] 下庶子分

字大庭にあります。相模国の名家中村庄司宗平の三男、三郎宗遠は、大住郡土屋郷に館を構え、土屋三郎宗遠といい、源頼朝の配下として活躍しました。館は丘陵にあり、付近に袖切坂・馬場・大手・牢屋敷・のろし台などの遺跡が残っています。この地は、丘陵起伏の中にあって、田あり畑あり山林あり、また北側は金目川に囲まれ良

質の水が豊富であるため、城を構えるには最適の地といわれています。しかも台地（一名”のろし台”）に立ってみると、北に真田の館、艮（うしとら：北東）に岡崎の館、南に二宮の館、西に中村の館を望み見ることができて、一朝有事のときは、のろしにより相呼応することができたと伝えられています。惣領分は嫡男土屋二郎宗光の領分に、庶子分は養子で岡崎四郎義実の次男の土屋次郎義清の領分に、寺分は建立または再興した寺々のための領分にと、分け与えられたといわれています。

現在は、この地は段々畑になっていて、三方が雑木林に囲まれ、南に開けた閑静なところとなっています。また、西側の山林の中腹には、土屋氏一族の墓が館跡を見守るようにあります。

・土屋氏一族の墓 [I-28] 下庶子分

大乘院から南へ約100m行った土屋城跡の傾斜面の中腹、館跡の西方にあります。字大庭1167番地付近にあたります。

風土記には「古碑一基土屋三郎宗遠の墓碑と云う」と書いてあります。

しかし、現在は一基だけでなく数基見えます。中世の豪族の墓にしては、大変狭苦しい所がありますが、もともとは下段の現在畑になっているところにありました。館跡が畑に開墾された昭和10年（1935）ころ、供養碑・五輪塔等を現在地に収集移籍しました。

ここにあるのは五輪塔であり、五輪塔は一般的に供養塔として立てられたものがほとんどです。あるいは、これも後世の人が供養の意味で立てたものかとも思われます。和田合戦の折に、義清は和田氏に味方し建保元年（1213）5月2日に戦死し、宗光は嘉禎元年（1235）5月没（52才）と伝えられています。

三郎宗遠は、建保6年（1218）8月5日没（90才）となっています。

現在は、毎年夏に土屋三郎宗遠公遺跡保存会によって、墓苑周辺の草刈りや整備作業をして、どなたが見学に来られてもよいようにしています。

また、毎年5月8日には、宗遠公の念仏講（墓前祭）を、ここ一族の墓前において、念仏講のみなさんと保存会のみなさんによって執り行っています。なお、宗遠公の命日が8月5日であり、真夏日でなおかつ盆月のため、日を読み替えて5月8日にしたといわれています。

〔現在の墓地状況〕

1. 土屋三郎宗遠一族の供養碑（木製説明板）
2. 五輪塔 23基、供養塔 3基、石碑（板碑） 2基
3. 石碑（説明碑）・源頼朝公源氏再興石橋山参陣八百年記念
・地頭土屋三郎平宗遠公一族之墓苑
・浩宮徳仁殿下一行当所見学記念 昭和54年9月12日
4. 浩宮徳仁殿下一行当所見学記念樹（いちょう：銀杏 1本）
記念碑（木製）土屋三郎宗遠公遺跡保存会建立 昭和54年9月12日

・牢屋敷跡 [I-29] 下庶子分

土屋氏の時代に、囚人を収容していたところで、土屋の館（土屋城）跡の裏山付近（1143番地付近）にあったという説があります。

・子育て地蔵（門前地蔵） [I-30] 下庶子分

今は現存していませんが、字大庭1118番地付近にあった「宗憲寺」の寺域とみられるところに、このお地蔵さまが立っています。下庶子分バス停の少し奥まったところに、土屋内でも他にない立派な地蔵で、高さが台座を含め約1.3mのお地蔵さんが3体祀られています。向かって中央には、右手に杖を持った子育て地蔵が祀られ、刻まれた文字ははっきりしませんが、つぎのような文字が見えます。子育て地蔵の右には「享保五庚子三月日本願臥立青法印直祥」、子育て地蔵の左には、「岩船船念佛供養土屋郷庶子分村中男女」、その左側には、左手に未開敷蓮華（みかいふれんげ）を持った子育て地蔵が、また右側には、右手に錫杖（しゃくじょう）を持った子育て地蔵がなかよく並んでいます。

この子育て地蔵は、門前地蔵ともいわれ近所の人たちにたいへん親しまれ信仰されています。（注）享保年間：（1716～1735）

・大庭遺跡 [I-31] 下庶子分

平塚市教育委員会文化財保護担当が、平成2年に作成した埋蔵文化財一覧による。

・根岸古墳 [I-32] 下庶子分

平塚市教育委員会文化財保護担当が、平成2年に作成した埋蔵文化財一覧による。

・のろし台跡 [I-33] 小 熊

土屋宗遠は、その館付近の高台（高神山・大乘院付近）で、のろしを上げて岡崎・真田・二宮・中村氏と交信したといわれています。

防災行政無線放送所から西側一帯は、小高い丘でしたが、昭和40年代に切り崩されて、現在は畑地となっています。

・物見の松 [I-34] 小 熊

別名「旗立ての松」ともいわれ、土屋の館の後ろの丘（大乘院の東の馬場付近）にありました。これは見晴台の役目をしていたもので、異変が起きると、この見張りから館にその内容を逐一報告したと伝えられています。今でいうならば、望楼のようなもので、昔は松の木をもってこれに当てていたといわれています。

この松に白藤が絡みつき、開花時には藤沢の遊行寺坂からも見えたと、言い伝えられています。しかし、この松は現存していません。

・土屋竪穴式複郭古墳 [I-35] 小 熊

小熊の越光氏宅地内（大乘院の北側・熊野神社前）にあります。8畳敷ほどのほぼ矩形の竪穴があり、その北東に幅1mほどの羨門（せんもん）があって、斜め下に開け、その先に同じような室があります。この古墳を切り開いた時、「いちっこ」に軽く2杯ほどの人骨と小さな仏像（銅製の観音像・高さ約10cm）が現われました。

人骨は比較的新しく、この地域が土屋氏の館に近くて、北条早雲の軍勢などとの戦いがあったようなことから、戦いを避けて古墳にいた人たちが、遂に外に出る機会も

なく全員死亡したもので、仏像はその中の誰かが所持していた持仏であると思われます。人骨は越光氏によって手厚く葬られ、仏像には木祠がつくられ、古墳の近傍に安置されました。

この仏像は、1月18日・5月18日・9月18日の年3回、越光家の屋内に安置され、近所のお年寄りの方々によって、手厚く念仏供養されています。

(注) いちっこ：わらを編んで作った入れ物（直径60cm・高さ40cmの円筒状）で4ヶ所に縄をつけて、天びん棒で担いで物を運搬する道具。
現在のコンテナのようなもの。

(参考)：畚（もっこ）ともいい、藁筵（わらむしろ）や藁縄（わらなわ）を網状に編んで作った入れ物で、四隅に縄で吊り紐をつけ、天秤等で担いで物を運搬する道具。

・牢屋跡 [I-36] 小 熊

下庶子分の牢屋敷跡 [I-27] でも紹介しましたが、水呑地蔵 [小熊] の南側近くにも、一面敷石を並べた牢屋跡らしきものがありました。現在は、畑になっており、その畦畔に大きな石が置いてあります。この石は、今後調査する必要があると思います。

・水呑地蔵 [I-37] 小 熊

土屋の館跡・土屋一族の墓から西へ約400m行ったところにあります。土屋1065番地付近です。

鎌倉時代には、その周辺に牢屋・処刑場・さらし首場等がありました。ここは、処刑執行の前に罪人に末期の水を吞ませたといわれており、その供養として地蔵尊を祀って、地元の人が念仏講をしていました。現在でも、その供養念仏は行われています。

現在は、その周辺が開発され、当時の面影は全くありませんが、大乘院の檀家の人々により、水呑地蔵があったところに、祠（1間×1間）を再建して地蔵尊（子育て地蔵）を祀っています。

開発前の水呑地蔵周辺は、小高い山々に囲まれ、起伏の激しいところで、静かな敷地には鬼芝が生えていて、広々としていました。近所のお年寄りのみなさんは、「にしめ」や「おすし」等を持ち寄り、地蔵さんにお上げしてから、念仏講をし、こどもたちを交えて一日を楽しみ、かつ供養をしました。

また、水呑地蔵の前は坂になっていて、その坂を地元では「牢坂」（ろうざか・どうざか）と呼んでいます。

現在ある地蔵・石仏はつぎのとおりです。

1. 木祠	子育て地蔵（親子地蔵）	5. 庚申塔	10基
2. 単体地蔵	9体	6. 馬頭観音	3基
3. 五輪塔	1基	7. その他石碑	3基
4. 供養塔	3基		

現在この場所は、大庶子分自治会で管理する「ふるさとの森」になっています。

・処刑場跡

〔I-38〕

小 熊

水呑地蔵のところで記したように、その周辺で処刑が行われたのではないかと思います。

・さらし首跡

〔I-39〕

小 熊

処刑の行われた後、字長坂の458番地付近にその首がさらされたといわれています。県動物保護センター裏手の長坂を、小熊から三之塚を経て遠藤原へ抜ける途中の坂で、坂の中間あたりの左側に、大きな杉の木があります。そのあたりがさらし首の場といわれています。

(参考) 字小熊原と下大槻との境(土屋321番地先)に、下大槻地区に入っていますが、大規模な供養塔が立ち並んでいます。五輪塔15基・単体地蔵6体・庚申塔1基・石祠1があります。さらし首の場所は土屋側のこの近辺にもあったと思われ、その供養にこのような供養塔が祀られたのではないかと思います。

・浅間大社と「国威発揚」の碑

〔I-40〕

小 熊

現在の下庶子分「土屋台」地区は、昔「鉄砲馬場」と呼ばれた広い台地として開けていました。その一角に「相馬神社」「若宮八幡」があり(現在相馬神社は、熊野神社の社域にある)、その隣にこの「国威発揚」の碑が立っていました。これには、村の人たちの名が見えます。

この碑は平成11年3月4日に相馬神社同様に、熊野神社の社域に移転されました。

・小熊の腰郭(曲輪)と古井戸跡

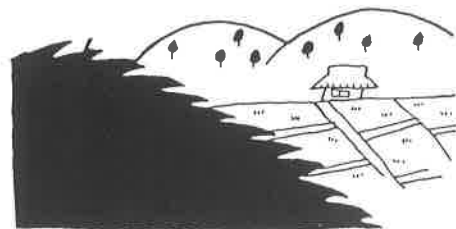
〔I-41〕

小 熊

「字小熊222番地 蓑島英寿氏宅裏手」一帯は、竹藪になっており、そこには「腰郭」「腰曲輪」(こしくるわ)と呼ばれる曲輪と土塁が現存しています。急斜面に幅1m程の古道があり、一直線に下がっていくと右手に弁天様が祀られている古井戸と思われる跡があり、清水が湧き出しています。他にも曲輪の根下に、2つの古井戸跡らしきものがあります。

平安末期つまり土屋三郎宗遠が紀州の熊野権現を勧請したときに、当地の武士・蓑島氏を招聘して、腰曲輪や井戸等を要塞の構えとして、土屋の館の裏手、つまり北面を守護させたと思われます。

現在でも熊野神社を左右に取り囲むようにして、小熊集落の北側に蓑島氏の家宅が9軒ほど並んでいます。これは特に北面からの防御に備えた、格好の自然の要害[ようがい・ヨウゲエ(土塁・曲輪・沼地で現在は田んぼ・中川・金目川)]を利用したものと思われます。なお、曲輪とは「郭」とも書き、城・砦(とりで)等の周囲を土や石でめぐらした囲いをいいます。



小熊・庶子分周辺図



・練り田・練り畑 (ねりた・ねりばたけ) [I-42] 小 熊

字小熊下にあり、土屋の郷社熊野神社の祭礼のとき、神輿を担ぎながら、練り歩いた田や畑で、神社・寺院の由来の熊野神社のところで詳しく説明されています。

・六体地蔵と供養塔 [I-43] 小 熊

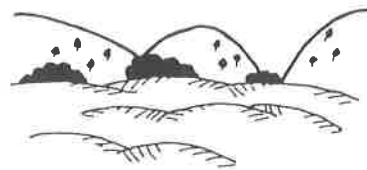
字小熊225番地の民家の脇に、一石六面六地蔵の六体地蔵と供養塔があります。小道を挟んだその反対側には、道祖神のところで説明した「小熊の道祖神」があります。

供養塔には、「〇月〇境居士霊位 明和丙戌年八月六日」と、刻まれています。

一石六面六地蔵は、土屋ではめずらしく、非常に興味が持たれます。

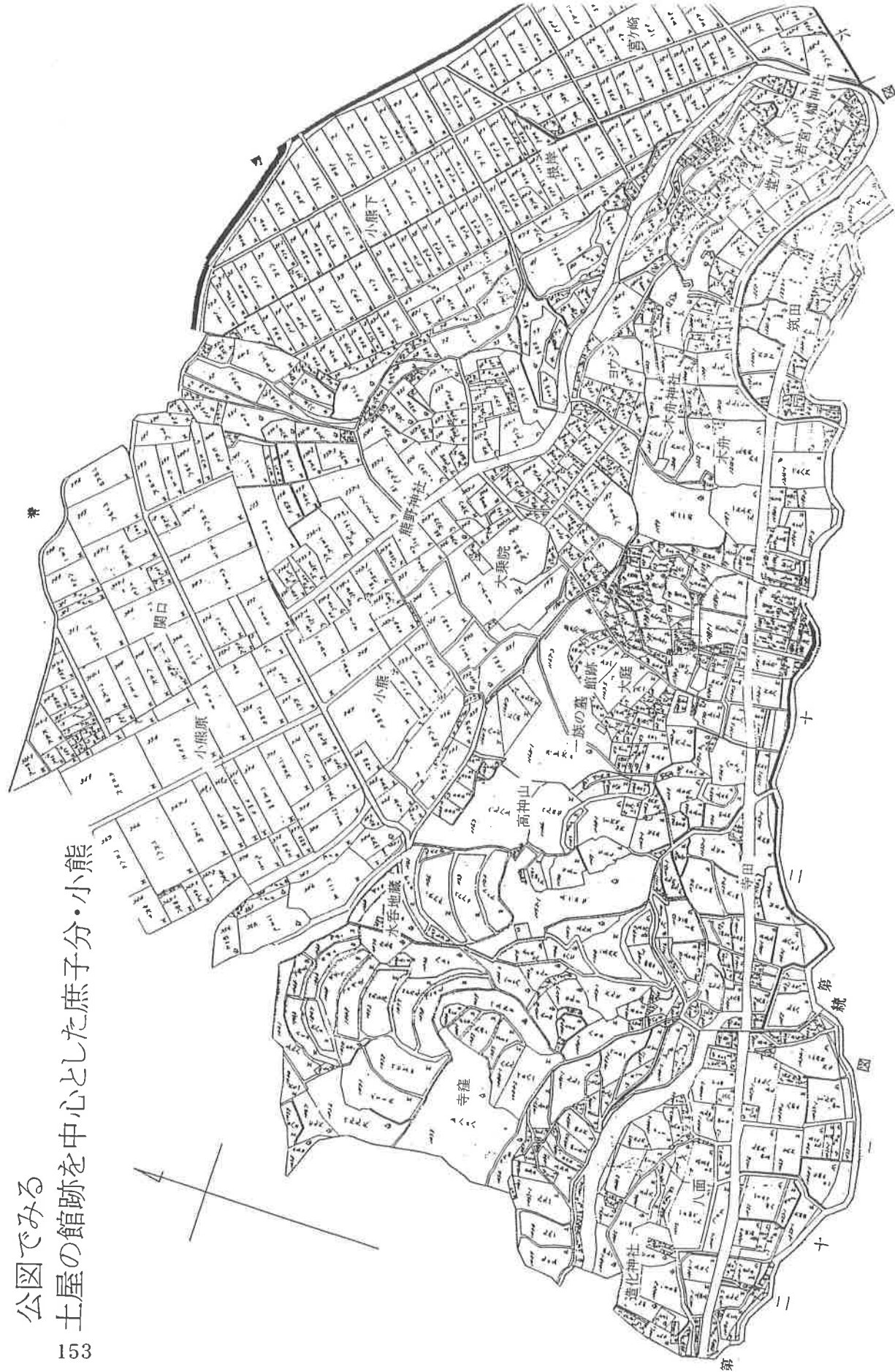
六地蔵とは、人は地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道を生まれ変わり、死に変わりして、無始・無終に迷いの世界を巡るといいます。その苦しみを救うために六道のそれぞれに一体ずつ地蔵尊がおります。この信仰は、平安末期に始まり、六体の地蔵尊を一か所に立てるのと、村の要所要所に各一尊ずつ配するのと二通りあります。また、その、六地蔵尊塔の形体は、丸彫像を六体揃えるものと、一石に六体を彫ったもの、あるいは石幢や石灯籠の六角形のそれぞれの側面に彫ったものなどがあります。小熊の六地蔵尊は、一石に六体を彫ったものに当たります。

(注) 明和年間：(1764～1771)



公図でみる
土屋の館跡を中心とした庶子分・小熊

153



- ・日牌堂と鐘楼 [I-44] 小 熊

日牌堂内の一段と高い壇上の中央に、「阿弥陀如来座像」が安置され、その左には大きな厨子が両開きの扉が閉まったまま、ふたつ置かれています。また、この日牌堂の敷地内に、鐘楼があり、太平洋戦争の時に供出した「吊鐘」の代わりに、現在は「半鐘」がつるしてあります。判読できないところもありますが、次のような文字が見えます。「如我昔所願 今者已満足 相州大住郡土屋村日牌堂常住物願主覺譽量西
明和八辛卯 歳三月吉辰 施主 享保二十丙辰年 人増 持荻野六郎兵衛
鑄物師 野列佐也 大川太郎兵衛藤原宗封」
(注) 享保年間：(1716～1735)、明和年間：(1764～1771)
- ・小熊A遺跡 [I-45] 小 熊

平塚市教育委員会文化財保護担当が、平成2年に作成した埋蔵文化財一覧による。
- ・小熊B遺跡 [I-46] 小 熊

平塚市教育委員会文化財保護担当が、平成2年に作成した埋蔵文化財一覧による。
- ・小熊原遺跡 [I-47] 小 熊

平塚市教育委員会文化財保護担当が、平成2年に作成した埋蔵文化財一覧による。
- ・長坂遺跡 [I-48] 小 熊

平塚市教育委員会文化財保護担当が、平成2年に作成した埋蔵文化財一覧による。
- ・ヨウジ遺跡 [I-49] 小 熊

平塚市教育委員会文化財保護担当が、平成2年に作成した埋蔵文化財一覧による。
- ・遠藤原の大山灯籠 [I-50] 遠藤原

遠藤原531番地付近にあり、遠藤原地区入り口に大きな石灯籠があります。毎年7月28日に清掃して、8月15日まで毎晩火を灯します。火を入れる家は決まっていますその順番で行います。この灯籠には、「蓑島」「村山」「原」の名が見えます。
- ・遠藤原の地蔵座像 [I-51] 遠藤原

須藤商店の玄関の前の路傍に、地蔵菩薩座像が安置されています。これは、享保年間(1716～1735)に天災が続発し、農村凶荒に陥ったときで、村民の地蔵に対する切なる願いが、このような形で祀られたのではないかと思います。須藤氏は、風雨にかかわらず毎日お線香をあげて、お祈りをし供養しておられます。この地蔵さまの正面には、「奉造立塞念仏供養所 為念仏講〇定 享保元年丙申天十一月吉日」、右には「遠藤原村 毎日晨朝入於語定 造化六道楼若興楽」、左には「汝等〇行是菩薩道漸々修学悉等成佛」と刻まれています。

・比丘尼塚 [I-52] 遠藤原

むかし、比丘尼（びくに）が埋葬された塚ではないかと思われます。

比丘（びく）とは、パーリ語 [b h i k q u] で仏門に帰依し、具足戒を受けた男子、即ち僧のこと・世俗をはなれ出家して修行する者・乞う者・誤って比丘尼の称・女子をいやしめていう語ともいわれ、昔、この地を旅した比丘が行き倒れとなり、村人たちに葬られたともわれます。

また、一説にはこの塚を、畑に開墾するため土地の使用者が崩したら、麦の穂が目刺さり災難にあったといわれ、供養にこの石碑を立てたともいわれています。

石碑には「光源妙心尼塚 昭和十年三月九日建立 関野慶造」と刻まれています。

・五十塚 [I-53] 遠藤原

遠藤原地区の特に西側地区、いわゆる字遠原地区は塚が数多くありました。土屋地区だけでなく、となりの中井町の開けた畑地もその区域に指定されています。

ここは、前述したように相当激しい戦闘が展開されたものと思われます。塚が50ヶ所ほどあったので、そのような名が付けられたと思われます。

・六十塚 [I-54] 遠藤原

この塚も五十塚と同様のことがいえます。

六十塚については、中井町側の畑の中に、高さおよそ1.2mほどの供養塔が2つ立っています。向かって左の供養塔は、「神徳六十塚権現萬民安泰悪病消滅」と刻まれています。もうひとつの供養塔には、「神徳六十塚権現霊神ハ原大隅守管士則明外数名ノ武者ナリ之ヲ示ス昭和三十三年九月二十三日 神通力者 原覚道 当年六十九才」とあり、裏には原・村山・山口の名があります。

・三之塚（三王塚） [I-55] 遠藤原

長坂のさらし首場のところから、坂を登りつめると、左手に大きな塚が現れます。直径10mほどの塚で、塚として十分確認がとれます。開発せず残してやりたいもののひとつです。しばらく西へ向かって進むと、こんどは右手に小さな直径5mほどの塚があります。この塚は削られてその面影はありません。もうひとつありましたが、現在はその姿はありません。このように3ヶ所の塚があったので、三の塚または三之塚といわれていますが、三王塚（さんのうづか）ともいわれています。

・遠藤原A古墳 [I-56] 遠藤原

平塚市教育委員会文化財保護担当が、平成2年に作成した埋蔵文化財一覧による。

・遠藤原A遺跡 [I-57] 遠藤原

平塚市教育委員会文化財保護担当が、平成2年に作成した埋蔵文化財一覧による。

・遠藤原B古墳 [I-58] 遠藤原

平塚市教育委員会文化財保護担当が、平成2年に作成した埋蔵文化財一覧による。

- ・ 遠藤原B遺跡 [I - 5 9] 遠藤原
平塚市教育委員会文化財保護担当が、平成2年に作成した埋蔵文化財一覧による。
- ・ 遠原古墳 [I - 6 0] 遠藤原
平塚市教育委員会文化財保護担当が、平成2年に作成した埋蔵文化財一覧による。
- ・ 遠原遺跡 [I - 6 1] 遠藤原
平塚市教育委員会文化財保護担当が、平成2年に作成した埋蔵文化財一覧による。
- ・ 土屋窪地下式坑 [I - 6 2] 寺分中
土屋でもめずらしい、複雑な構造をした古墳で、小字のところ（土屋窪）で説明しています。
- ・ 富士講石碑 [I - 6 3] 寺分中
字梨子木窪（土屋1992番地付近）のふじ山の山頂に、2つの石祠があります。一つは高津誠氏、もう一つは水島政利氏が管理しています。
- ・ 打越遺跡 [I - 6 4] 寺分中
平塚市教育委員会文化財保護担当が、平成2年に作成した埋蔵文化財一覧による。
- ・ 梨子木窪遺跡 [I - 6 5] 寺分中
平塚市教育委員会文化財保護担当が、平成2年に作成した埋蔵文化財一覧による。
- ・ 妙円寺の石仏 [I - 6 6] 早 田
早田の銭洗い弁天として知られている妙円寺の岩窟には、弁天社・大日如来・大師（天台・伝教）・舟地藏・宇賀神などの石仏が祀られています。宇賀神は蛇の体を持った老翁の姿、大日如来は金剛界と胎蔵界の両方があるといった具合に、特色ある石仏があります。
- ・ 早田の石仏ーその1ー [I - 6 7] 早 田
青年会館（早田2324番地）の前には、石碑2基と鐘1基があります。
石碑の内1基は、つぎのような銘が刻まれています。
「享保十三戊申天 大乘妙興六十六部供養十一月功德日」
鐘には、つぎのような銘が刻まれています。
表 「相模大住郡土屋上寺分地藏常付物願主 寛政心了 寛政四壬子年九月吉
惣村中」
裏 「相模国足柄下郡小田原新宿町 大工 山田治郎左衛門 藤原考治」
この他に会館内には、地藏菩薩座像2体（1体は石像）が安置され、早田の人々により崇拝されています。
（注）享保13年：1728年
寛政 4年：1792年

早田自治会館（青年会館）そばの三笠川に架かるコンクリート橋を渡って、字風越へ入って行くと、右手に横山氏宅の屋敷が並び、そこを通り過ぎると急に左へ曲がる急坂があります。その左手の高台の林に「ミョウリの観音様」が木祠に入って祀られています。この観音様は、石で造られており「如意輪観音半跏像」のようです。地元では「安産の観音様」として、崇拝されています。また、同じ敷地内に、地藏菩薩像・観音菩薩像・供養塔等が、次のとおりに、祀られています。

- ① 地藏菩薩立像（合掌）延宝6年（1678）7月
- ② 地藏菩薩立像（合掌）
- ③ 地藏菩薩座像（日月清明・天下泰平）施主土屋村早田 横山太良右エ門
- ④ 観音菩薩立像 宝暦11年（1761）6月25日
観相栄壽信女 梅林浄観大徳
- ⑤ 観音霊場供養塔

奉拝禮 四国・西国・秩父・坂東供養塔（日月和願・天下泰平）

安政4丁巳年（1857）2月吉祥日 施主 土屋村早田 横山太良右エ門

なお、この道は古く、早田から琵琶へと通ずる最短ルート（徒歩で6～8分）として重要な道です。

この「ミョウリの観音様」から琵琶へ約250mほど行ったところの左手に、原氏の「稻荷様」が祀られています。この「稻荷様」を通り過ぎて100mほど行くと、琵琶の「泰之前」に出ます。



・忠魂碑 [I-68] 人 増

字田代（土屋2136番地付近）にあります。市道15号線のJA湘南農協土沢支所より東へ約100mほどいった左手の高台に、3基の大きな石碑が立っています。

正面の大きな碑には、「忠魂碑」と鮮やかに大きく、「陸軍大将山梨半造書」と刻まれています。裏には、「大正十二年五月建設」と刻まれています。その左右の碑には、土沢村の英霊の氏名が刻まれ、誉高く祀られています。

ここには、西南戦争以後太平洋戦争にいたる間の戦争で、我が身をかえりみず、国のために殉じられた、土沢地区の160柱の「英霊」が祀られています。

土屋地区	英霊	99柱	遺族数	79戸	
吉沢地区	英霊	33柱	遺族数	32戸	(平成6年遺族会調べ)

忠魂碑に刻まれている英霊者 (土沢地区合計 160柱)

・西南戦争	1	・日清戦争	1	・日露戦争	7	・満州守備	1
・満州事変	1	・支那事変	17	・大東亜戦争	131	・軍艦河内殉職	1

[資 料]

(前略)

顧みるに、各位には祖国防衛と東洋平和のため、ひいては世界平和招来のため、敢然と難に赴き又は国土を護って悪戦苦闘の後、あるいは弾丸に死し、あるいは疫癘に斃れ、春秋中に富む身を可惜散華せられたのであります。もとより各位は身を国家に捧げて、生還を期せられず武人の本懐でありましょうが、今次の大戦は国策上の大きな誤りに災いされて、建国以来未だかつて嘗めたことのない、一大敗戦の憂き目にあい、光輝ある歴史を汚したことを思うとき、返す返すも残念なことで、洵に痛恨の情に堪えません。

殊に国家至上命令に従って、最愛の肉親を戦争の為に捧げられ、しかもほとんど報いられるところがなかったにも拘らず、黙々として苦難に耐え、荊の道を切り開いて生き抜いてこられた、ご遺族の方のご心情を思うとき、唯々お気の毒と申し上げるばかりありません。

今や我が国は、独立自主権を回復して、民主的文化的国家の建設に邁進しつつあることは、誠に喜ばしい事です。これは一に連合国の恩恵を越えての、人類愛の基づく和解と信頼、並びに国民自身の誠意と努力による事は論をまたないが、国威の宣揚に、霊位を寄せられた戦没者のご加護のしからしめる所であって、我々同胞は衷心より敬意と感謝を捧げるものであります。

新生日本は、波風荒い国際情勢に棹さして、内治外交ともに多事多難であります。我々は強い自覚と反省とをもって、尊い犠牲を以てかちえた民主的・文化的国家を有終の美を発揮すべく、同胞相和して文化・福祉社会を建設し、永久に自由平等平和の維持に努力することこそ、戦没者各位の霊に報いる最善の道と信じます。

而して、ご遺族の方に対しては、公私共にでき得る限りの温かい援護の手を差しのべ、多年のご苦労にお報いしたいと存じます。

本日の追悼式にあたり、戦没者の英霊に対し、哀悼の誠を捧げるとともに、ご遺族

の方に衷心より弔意を表す次第です。

昭和二十八年三月二十四日

〇〇〇村長

〇〇〇〇〇

(某村慰霊祭の式辞より)

戦時中は英霊が帰還すると、村はずれの土屋橋まで村役場の職員・親戚の人・近所の方々・学校の生徒・在郷軍人等が出迎えて、自宅まで帰還されました。後日、学校の校庭で、しめやかの中にも盛大な「村葬」が執り行われました。

「軍国の家」として、皆さんから崇められました。

忠魂碑の前では、慰霊祭が村の有志を大勢集め、学校の生徒も参列して執り行われました。戦時中は毎年3月10日に、下記の「忠魂碑の歌」を斉唱しました。

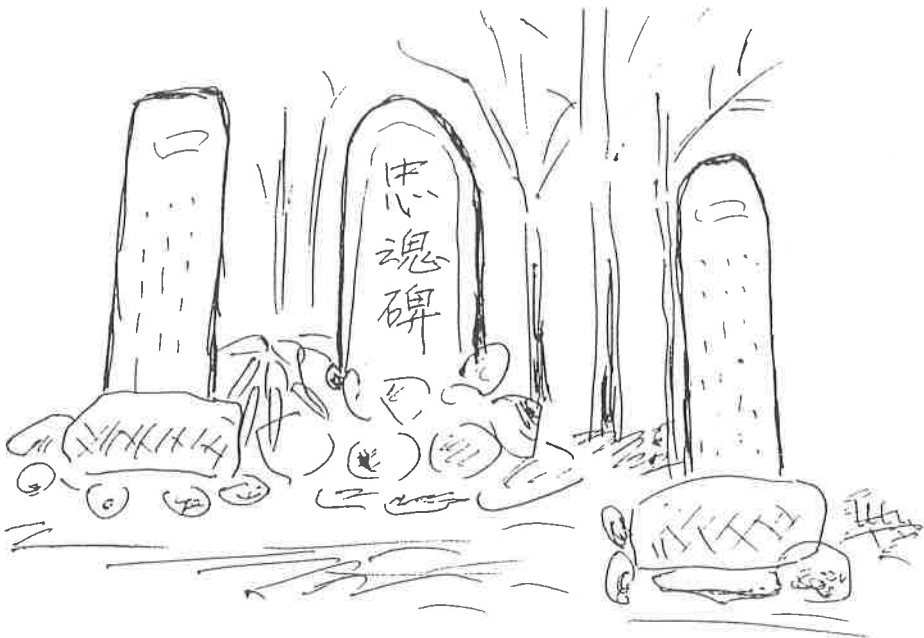
忠 魂 碑 の 歌

1 お国の為に いさぎよく
花と散りにし 人々の
みたまはここにぞ 静まれる

2 命はかるく 義は重し
その義をふみて 大君に
命ささげし ますらおよ

3 村の真中の 人増に
石碑と 高くまつられて
ほまれは世々に 残るなり

土沢の忠魂碑



向かつて右の石碑 (上部)

西南役

安居院唯五郎

支那事变

日清戦争

袁島 覺 蔵

日露戦争

水島陽之助

石黒軍次郎

石黒森吉

野川卯之助

大久保彌市

井沢大次郎

原 豊吉

満州守備 原 吉平

満州事变

向かつて右の石碑 (下部)

石黒喜代郎

横山 浅義一

成川 明信義

蓑島 富明次

佐藤 信雄

遠藤 吉造

石塚 高軍治

安池 春治

杉山 義力

原 義男

上原 伯男

横山 健三

誠三

大野 政吉

山田 正治

横田 一治

増尾 萬造

横山 峯吉

安池 喜作

蓑島 鉄五郎

大野 秀徳三

石黒 宗之助

岩本 久吉

若林 賢三

山水 造

造三

木村 七三雄

柏宮 徳鋭二

二宮 音蔵

野口 俊蔵

蓑島 広司

岩本 貞次

沢本 武蔵

榎本 吉蔵

山本 武蔵

栗山 代佑

二宮 光之助

石黒 富次郎

原山 雄蔵

大東亜戦争

遠藤 修三

山本 良三

野川 一雄

村田 三雄

山田 春雄

増尾 貞三

原山 角三

横井 千太郎

石川 嘉三

野川 重三

原村 俊勝

木島 義

蓑島

坂間 美智夫

安光 照一

越宮 八郎

二川 寅之助

吉川 寅一

綾部 水一

小清水 登太

榎本 勝一

藤本 憲一

野川 勝一

吉川 孝三

鈴木 仙太郎

熊沢 国蔵

向かつて左の石碑 (上部)

大東亞戦争
岩本喜作
二宮数雄
石黒正治
石黒富治
内海源七
小清水大丈夫
大野泰直
石黒喜久雄
榎本武雄
片木謙士
土方豊作
吉川富雄
二宮雄治
水島中治

向かつて左の石碑 (下部)

軍艦河内殉職
山田正義
支那事变
浜田徳造
大東亞戦争
岩島勇之助
岩本嘉助
富田勝元
柳板勝勲
熊沢板智
小清水平吉
石田準一
岩本興司
山本恒雄
秋山森平

小清水宗準
杉山武雄
秋山信次
萩野熊次
山本光造
増尾富蔵
石黒美良蔵
増尾美良蔵
岩本三郎
二宮三郎
杉山三郎
井沢三郎
秋山三郎
箕島秀三郎
内海武三郎

西ヶ谷良三
横山三吉
石黒鶴雄
横山晴雄
岩本寅三
岩島寅三
山本丑寅
熊沢重信
浜田重信
綾部狸三郎
熊沢狸三郎
大野力三郎
原野七郎
吉川政七郎
水島政七郎

植原次男
秋山保正
安池正蔵
椎野半蔵
清見三十郎
石黒誠三郎
横尾善一郎
萩野善一郎
石井豊作
水島豊作
蓑島文勝
鈴木文勝
二宮末義
吉川三郎

林宇三郎
村山登美郎
内海米蔵
秋山米蔵
蓑島米蔵
二宮米蔵

・人増の館跡

[I-69]

人 増

人増2188番地の水島貞氏宅付近一帯は、戦国時代に造られたと思われる、屋敷を取り囲むようにして、要害（土塁と堀をめぐらした屋敷）を施した武家屋敷跡がみられます。

このような貴重な館跡が、保存されていることは、まことにすばらしいことだと思います。その屋敷も戦国時代が終息し、近世へと時代が移ると、武士から農民となって、そこに留まり、その屋敷の様相も次第に変わっていったと思われます。

・人増の石仏群

[I-70]

人 増

人増のJA湘南土沢支所の近くにある、人増自治会館には、多くの石仏が集められています。宝永3年（1706）の名号塔、宝暦12年（1762）の聖観音・馬頭観音、寛政6年（1794）の法華経塔、文政8年（1825）徳本名号塔、安政4年（1857）の道祖神、文久2年（1862）の庚申塔・后土神などです。この文久2年（1862）の庚申塔・后土神などです。

これらの石仏等は、土屋内でも質・数ともに優れたものがあり、特に文久2年（1862）の庚申塔（青面金剛庚申塔）は、市域の石仏の中では、優れた彫りをもっています。また、会館内には地藏菩薩座像が安置されています。

〔石仏等の詳細〕

1. 半鐘

相州大住郡土屋寺分村 水嶋忠左衛門種昌 為百万遍供養講中為庚申供養講中
相州大住郡土屋寺分村 阿弥陀堂半鐘 諸行無常是生滅法 生滅々己寂滅為樂
衆生国生法性地獄天宮皆 為浄土有情無情〇〇成佛道
元禄十二己卯四月八日

木蓮社覚譽艶歴上人 必至大和尚 江戸神田鍛冶町 粉川屋仁左衛門作

2. 自治会館敷地内

・無縁供養塔 光明遍照十方世界 念佛衆生撰取不捨 昭和五十九年八月吉日建之
願主 人増自治会

・彫像八体地藏塔

・后土神塔（円筒塔）時文久二年壬戌年仲春吉日 真壁平之丞平義徳

・庚申塔（青面金剛庚申塔） 時文久二年壬戌載仲春吉日 真壁平之丞平義徳

・南無阿弥陀佛塔（名号塔） 南無観世音菩薩為百万遍供養 宝永三丙戌年

・観音像（彫像・蓮華持ち） 百万遍念佛 想廻〇〇 元禄〇〇年七月

・観音像（彫像・合掌）

・地藏尊（彫像） 台座に2体の観音像（合掌）が彫られています。

・法華経五千余部供養塔

上平塚寶積院住職隠居後於此処而當庵室伊勢州松坂産俗姓大久保也

寛政六甲申歳六月吉日 水島五良衛門 権大僧都法印義国大和尚

台座 相州大住郡土屋 延寶七年己未七月祥日

（注）延寶（えんぼう）年間：（1673～1680）

・墓石（円筒）「筆子塚の石塔か？」2基あり内1基に「真眼實道之墓」と刻まれています。

・墓石（方形） 判読できず不明。

・人増の大塚と三つの塚 [I-71] 人 増

大塚のあった場所は、現在でははっきりしていません。

また、「平塚市民俗調査報告書3-土屋・吉沢-（1983）平塚市史編さん課」によると、「三つの塚は、中学校の南方にある小高い山にあった三つの小さな塚のことで、今はその内の二つを壊して、ひとつだけが残っていて、元の塚のところには、石碑とお宮が立っている」と、記載されています。現在では、地元の人に伺っても、その位置は特定できません。

なお、この塚を壊した時に、塚の真ん中から碑が出てきて、これを人増の自治会館の前に祀ったといわれています。

・琵琶のオシャモツアンと石碑 [I-72] 琵琶

泰之前（だいのまえ）から神奈川大学の南側にある体育館へ通ずる急な坂道を、北へ約80m行った左手の畑の畦に、オシャモツアンという小さな屋形の石祠がありましたが、現在はその姿は見当たりません。

「オシャモツアン」とは、平塚市博物館の民族資料によると、稲荷のミケツ神（御食津神：稲生・田の神）から当てられたといわれています。（参考：上吉沢台の三狐（さんこ）神社）。それがどうしてオシャモツアンと呼ばれたかは、地元の人のお話によると、「稲荷は食べ物の神だからオシャモジサン、そしてオシャモツアンになったのではないか」ということです。オシャモツアンとはあまり聞き慣れない呼び名かもしれませんが、オシャモジ、あるいはオシャグチなどと呼ばれる神社は所々にあります。漢字が当てられる場合は、社宮神が多いのですが、すべてが稲荷ではありません。そこから20mほど行くと、右手の雑木林の中の高台に石碑が立っています。これは、昭和6年にこの道の改修工事を行った時に、瓶に入った人骨が出てきたので、土地の人がその霊を慰めるため、供養塔を立てたものです。それから、この地に幟を立て「ハヤリボトケ」さんとして、多くの人がお参りに来たそうです。なお、供養塔には次のように刻まれています。

（表） 泰久庵霊碑

（裏） 昭和六年三月二十一日於此處発掘古瓶一個及び古土器数個瓶中有白骨矣惟是上古人之墳墓乎仍今建一基之小碑聊慰古霊也

昭和六年八月二十一日 原 亀之輔建立

この坂を登り詰めると、眼下に神奈川大学の建物や土屋小学校の校舎が、また、その先には下大槻団地が見え、さらにはるか遠方には大山・丹沢山塊がその雄大な姿を見せてくれます。

・琵琶の供養塚 [I-73] 琵琶

子ノ神神社から杜鵑山へ向かって、50mほど坂道を登ったところを右に曲がって、雑木林の中を歩いて行くと三叉路になっていて、ここに「供養塚」があります。

ここは、明治以前から現在まで、琵琶地区の農家で飼っていた豚・牛・馬などの家畜や犬・猫の「お墓」として、供養されている場所です。一般に、ここは「辻（つじ）」と呼ばれています。

また、葬式がでたとき「忌中払い」をして、その後に、使用した「御祓」「竈の灰」「塩」をこの辻へ持って来ます。

・琵琶の馬頭観音 [I-74] 琵琶

供養塚からさらに雑木林の中を進んで行くと、「馬頭観音」があります。
この琵琶地区では、畑を耕したり、荷物を運ぶのに馬を使用していました。この馬の「ひづめ」を切ったり、「蹄鉄（ていてつ）」を直した所であり、ここに馬の供養の意味で、観音様が祀られています。

・人増の石仏 [I-75] 人増

字下水上ヶにある。トラック協会運動場管理棟東の真上に「文化七午天六月三十日」と刻まれた石仏一躯が、字人増から下三笠へ下る坂道の左手に、静かに安置されています。道行く人を見守る姿は、ひっそりとした素朴さを感じます。

